

第21号 (2001年10月5日) 発行所: 〒565-0871 吹田市山田丘1-2

大阪大学人間科学部 渥美公秀研究室 日本グループ・ダイナミックス学会 電話&Fax: 06-6879-8066

発行人: 堀毛一也 編集担当: 廣岡秀一

熊本大会直前号

日本グループ・ダイナミックス学会第49回大会へのご案内

大会準備委員長 熊本大学教育学部 篠原 弘章

過ごしやすい秋空の季節となりました。さて10月27日(土),28日(日)に熊本大学で開催される日本グループ・ダイナミックス第49回大会が近づいてまいりました。 まもなく大会プログラムが皆様のお手元に届くことかと思います。

さて今回の大会では,ロングスピーチ4件,ショートスピーチ29件,そして新しい試みである英語スピーチ11件,ポスター発表40件の合計84件となっています。発表申し込みは当初105件ありましたが,最終的に原稿提出が84件にとどまり20件程度減少したのは残念です。内容は,地域社会やボランチア活動,環境問題,組織と集団,認知と多岐にわたって会員の広い関心を示しています。また英語スピーチには外国人3人が含まれています。

さらに5つのシンポジウムがもたれます。テーマは,一つ目は京都大学教授杉万俊夫氏の司会による「21世紀のアジアとグループ・ダイナッミクス」,二つ目が韓国のキム教授企画による "The concept of self, relationship, and achievement" , 三つ目はニュージランドのジェムズ・リュウ教授企画の "Dynamics of History" ,四つ目が大会準備委員会企画の「学校教育とグループ・ダイナミックス」,五番目が「日本人の自尊心と自己卑下」というテーマです。これらのシンポジウムは,海外からのゲストも交えたグループ・ダイナミックスの未来と過去および現在を見据えた国際的なテーマと,さらに教育問題,日本人の特性についての今日的なテーマとなっています。シンポジウムでの議論の深まりによって,今後の研究のよい指針が得られることが期待されます。

また,初企画として常任理事会企画のワークショップが3つ企画されています。

一つは、「研究法に関する基本姿勢を問う」として、兵庫教育大学教授の吉田寿夫氏に講師をお願いし、「研究法のマニュアル化、追試に関する狭い考え、データ解析法への過度の依存、統計モデルの無批判な当てはめ等々の問題点」について演習形式の研修会がもたれます。

今年の七月初旬にはオーストラリアのメルボルンで第四回アジア社会心理学会が開催されましたが、今後とも海外、国内を問わず英語による学会発表の機会がますます増加することが予想されます。これを鑑みて二つ目は、「英語による学会発表」として北海道大学教授の山岸俊男氏を講師に迎え、海外での学会発表について知っておくと便利なノウハウについて話していただく予定です。内容は、「どんな学会で発表するのがいいのか、どうやって申し込むのか、学会発表に審査がある場合もある、口頭発表とパネル発表のどちらにすべきか、OHP、パワーポイント原稿の作り方、パネル原稿の作り方、質問がわかからないときどうするか」等についてです。多数の若い会員のご参加をお待ちしています。

三つ目は,理論と実践との架け橋をもとめて「研究者と現場:研究者にもとめること」 というテーマで実践家との交流の場が企画されています。このワークショップでは,阪神 淡路大震災の被災地行政機関で震災復興にご尽力されてきた明石照久氏(神戸市都市整備公社勤務,博士(政治学))と,被災地で活発な市民活動を行っておられる実吉威氏(特定非営利活動法人,市民活動センター神戸)のお二人から,活動現場の目で見た研究者に対する率直な意見を語っていただきます。すでに現場での実践的研究をされている会員,今後そうした現場研究を始められる会員の方々の積極的なご参加をお待ちしています。

なお、大会初日の夕方には、学内の「くすのき会館」内のレセプションルームで懇親会を予定しています。熊本の食事とお酒をお楽しみください。多くの方々のご参加によって、会員相互のコミュニケーションが深まることを願っています。まだお申し込みいただいていない方もどうぞお誘い合わせのうえ、多数の方々のご参加をお待ちしています。

本大会についてのお問い合わせは、下記へご連絡ください。

〒860-8555 熊本市黒髪 2 - 4 0 - 1 熊本大学教育学部学校教育(心理学系) 日本グループダイナミックス学会第49回大会準備委員会

Tel&Fax 096-342-2639 (心理学科図書室) E-MAIL:sinohara@gpo.kumamoto-u.ac.jp

AJSPとの合意事項について

メルボルン大会の折りに、AASPの理事の先生方との協議が開催されました。その折りの合意事項につきましては、山口先生、渥美先生におまとめいただいた内容を、すでにメールマガジン(グルダイ・フラッシュ)等でお知らせいたしておりますが、あらためてここに掲載させていただきます。

また内容につきまして、いろいろとご意見頂戴できれば幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

Initial Agreements between the JGDA Executives and the AASP Executives

- 1. AASP has agreed to appoint a Japanese social psychologist, who is nominated by JGDA, as an associate editor of AJSP; on the condition that the nominee can serve as a regular associate editor in English.
- 2. AASP has agreed to publish the English translation of one JGDA award paper.For this purpose, AASP will provide space in each AJSP volume (i.e., per year), which is approximately equivalent to 20 pages of a double-spaced manuscript.
- 3. AASP proposes that a special issue or section on "Social Psychology in Japan" be published in 2003. The exact terms of this special issue or section will be worked out later between the two associations.
- 4. JGDA and AASP will jointly negotiate with Blackwell. In doing so, we will try to lower the minimum committment of JGDA to 600.
- 5. JGDA will accept that AASP stops their subsidization. As a result, JGDA will pay \$34/volume rather than \$30/volume.
- 6. AASP will pay for a price hike, if any, in the future. This means that JGDA will not be required to pay more than \$34/volume.
- 7. JGDA will receive 65% of the journal royalty.
- 8. AASP has promised to develop collaborations with academic associations in countries other than Japan as well.
- 9. AASP will write a letter of appreciation for JGDA's support, which will appear in JGDA's newsletter.
- 10. To facilitate academic exchanges among JGDA and AASP members, AASP has agreed to: (a) send almost 10 AASP members to JGDA's Kumamoto conference this fall; (b) publish their membership directory and make it available to JGDA members. 11. JGDA and AASP have agreed to have more joint activities, details of which will be worked out later.

第4回常任理事会・第4回常任編集委員会議事録

日本グループ・ダイナミックス学会

2000年度 第4回 常任理事会・常任編集委員会議事録

日時:2001年7月1日 12:30-14:20

場所:東京大学山口研究室

出席者:堀毛一也・渥美公秀・大渕憲一・廣岡秀一・松井豊・村田光二・山口勧

常任理事会

【審議事項】

広報

ぐるだいニュースNo.21を9月中旬に発行することとした。No.23までは、従来どおり郵送し、それ以降、電子化の実現を考えることとした。

将来計画

- 1. 社会人研修講座へのグループ・ダイナミックス学会員の参加費を7,000円とすることが了承された。また、講師への依頼状を学会から発送することとし、謝礼金額も了承された。参加者数にも依存するが、グループ・ダイナミックス学会として収入が見込まれることが報告された。
- 2.熊本大会における(常任)理事会主催のワークショップについて、2日目の午後が予定されている旨報告があり、話題提供者(非会員)には、学会からの謝礼を支払うこととした。

涉外

平成13年度のAJSP発刊に対して、科学研究費補助金800,000円の交付が決定したことが 報告された。

AJSPの契約更新にあたり、常任理事会として、アジア社会心理学会から提示された提案のうち、「現状維持」という提案を受け入れ、今後もアジア社会心理学会との共同出版を継続することを承認した。ただし、これまでに指摘されてきた問題点の解決に向けて努力していくこと、自学会の学会誌でもあることから編集権の拡大に努めること(具体的には、当学会から Associate Editor を推挙する)、会員へのメリットを増大していくこと(具体的には、当学会で優秀論文賞を受賞した論文を翻訳掲載すること)などを念頭に置いて交渉を進め、AJSPのみならず、Progress in Asian Social Psychology や大会への参加などを含めて、アジア社会心理学会との関係を改善・維持・発展させることとした。

これを受けて、引き続き開催される理事会での意見交換を行い、理事会の承認を得た上で、アジア社会心理学会とメルボルンで交渉にあたり、さらにBlackwell社との交渉を開始することが了承された。この協議結果を受けて、新年度の予算案などとともに常任理事会案を作成し、理事会、総会に提案し、協議をし、必要があれば修正して決定する。

会計・事務

入会希望者3名、退会希望者4名について承認した。なお、退会を希望する会員であって も、会費に未納分のある会員については、会費納入の督促を行い、支払いを確認した上で 退会を承認することを確認した。

その他

- 1.三隅賞規定について、事務局作成の原案と、アジア社会心理学会向け英文を検討し、承認した。次回の会員名簿に掲載するとともに、アジア社会心理学会に向けてアナウンスすることとした。
- 2 .メルボルン大会において、三隅賞受賞者(2000年度、2001年度)を表彰するにあたり、2001年度については、受賞者が未定なので、受賞者名を空欄のまま賞状を作成しておくこととした。
- 3.次回は、熊本大会の前日に開催するものとし、アジア社会心理学会関係等で緊急の議題が生じたときは、改めて日程調整を行うこととした。

【報告事項】

AASPメルボルン大会での学会としてのアピールの一環として、GD学会ブース内で学会および機関誌の広報を行い、熊本大学の会員の協力を得て熊本大会の案内を行う方針であるとの報告があり、広報材料の見本が提示された。

常任編集委員会

【審議事項】

第41巻1号を中心に、投稿・審査状況について審議した。

以上

----広告挿入 ----

第2回理事会議事録

日本グループ・ダイナミックス学会 2000年度 第2回 理事会議事録

日時:2001年7月1日 14:30-16:00

場所:東京大学東京大学文学部法文二号館多分野交流室 出席者:堀毛・渥美・大渕・廣岡・松井・村田・山口

結城・斎藤・大橋・永田・八ッ塚・矢守・沼崎・福島

【審議事項】

AJSPの今後について、事前送付資料、常任理事会での議論をもとに検討した。まず、会長より、議事進行について提案 - 事前配布資料の概要説明、理事からの意見提示、常任理事会の方針報告、議論、そして、最終合意 - があった。この方針に従い、資料説明の後、各理事から意見が出された。

AJSPの経費のうち、年間 1 巻あたり 4 ドルをアジア社会心理学会が負担してきたことを停止する理由について確認があり、本来これはグループ・ダイナミックス学会が支払うべきものであるから、契約更改を機に"正常化"することになるとの説明があった。

他の国では、アジア社会心理学会との連携を進める動きがあるかとの質問があり、韓国、台湾、中国香港、オーストラリア、さらに欧米について、現状が報告された。

台湾、中国香港、オーストラリア、さらに欧米について、現状が報告された。 科学研究費の総額について質問があり、直接出版経費のみに適用される助成なので、今回の獲得金額がほぼ満額に近いことが説明された。

- - - - - 広告挿入 - - - - -

オンラインジャーナル化について質問があり、今後交渉材料になると見られるが、現時点では、出版社の対応が未定である旨、説明があった。

次に、常任理事会の方針が報告された。これに対し、以下のような議論があった。

優秀論文賞を翻訳掲載することについては、既に合意済みのことではないかとの質問があり、二重投稿との疑念を払拭する方法、棄却率が60%に高まっているAJSPの現状を考慮する必要があることなどが提案の理由であり、現状に沿った対応が求められているとの説明があった。

AJSPの主体、および、将来展望について質す発言があり、当学会とアジア社会心理学会が対等な立場で運営し、将来展望についても共同で考えていく旨、回答があった。

購入部数を700部として交渉していくことの根拠について質問があり、会費未納者にまで配布している現状を改善し、"最低"700部を示しつつ、現状に沿った部数を購入することが検討されたことが報告され、さらに、交渉にあたっては、まず600部程度の数字から検討し、できるだけ、当学会の負担にならないように進めることが示された。

会員数に増減がある中で、常任理事会案によって、トータルコストが削減されるとの試算はあるのかと質す発言があり、前回の常任理事会で検討されたコスト削減試算について会長より説明があった。

Blackwell社以外との交渉も考えるのかという質問に対し、現状では、出版社を次々と変更することのデメリットも考慮しなければならないが、将来的には、国内外の業者を視野に入れて、柔軟に対応したいとの回答があった。

実験社会心理学研究英文号から、AJSPになって、メリットはあったのかという質問があり、確かに現状では学会員による論文掲載が増大したとはいえないが、編集に投入するエネルギーなども考慮すればメリットはあったと説明があった。

AJSPの掲載論文は文化心理学に偏っているのではないかとの指摘があったが、そのような編集方針があるわけではなく、事実、emotion について特集が組まれるなどの現状があるので、今後、当学会からも独自の分野から投稿していくことが望まれるとの意見があった。

中部地区からは、複数の学会員へのヒアリングの結果、常任理事会の方針を支持する意見があったことが表明された。また、欠席の沖縄地区、九州地区からは、事前に、常任理事会の方針と同様の趣旨を支持する声があったことが報告されていた。さらに、まだ最初の5年を経過したところであって、ようやく内容・運営について具体的に議論できる素材が出そろってきた状況であるから、常任理事会の方針に沿って、今後さらなる改善をもとに、自学会誌としての質を高めていくことを支持するコメントがあった。

以上の議論をもとに、会長から常任理事会の方針への反対意見が求められたが、特になかったので、常任理事会の方針に合意したことが確認され、理事会として、今後の交渉を常任理事会に託すことが承認された。

【報告事項】

メルボルン大会において、当学会のブースを設置し、学会および熊本大会のアピールを 行う事が報告され、ブースに持ち込む資料の見本が提示された。

以上

常任理事会主催 ワークショップのご案内

常任理事会では、学会の活性化の一環として、年次大会において理事会主催のワークショップ開催を計画いたしました。今年度大会での開催は理事会で検討していただく時間的ゆとりがなかったため、常任理事会主催として、大会主催校(熊本大学)に実施を依頼しました。大会委員長のご協力により、大会2日目の午前に、研究法ワークショップを2件、午後に実践家交流ワークショップを1件、それぞれ開催する準備を進めております。今年度のワークショップで一定の成果が得られれば、来年度以降は企画主体を理事会に移行し

て開催していただきたいと考えています。 以下に、今年度計画されているワークショップを紹介させていただきます。

ワークショップタイトル:研究法に関する基本姿勢を問う

話題提供者:吉田寿夫(兵庫教育大学・教授)

趣旨:本ワークショップでは,心理学的な研究を行なう際の方法論に関する基本姿勢とでもいうべき事柄について「あれこれ」述べたい。具体的には、「研究法の固定化・マニュアル化」、「一般化可能性についての誤解・追試に対する狭い考え」、「データ解析法への過度の依存・統計モデルの無批判な当てはめ」などの現状の問題点について論じる。

ワークショップタイトル:英語による学会発表

話題提供者:山岸俊男(北海道大学・教授)

趣旨:いくら立派な研究をしても、その成果を英語で発表しないかぎり、日本人以外の学者にとっては日本人研究者の研究はこの世に存在していないのと同じである。あなたの研究を知ってもらうために最も手軽な方法は、海外の学会で発表することである。ここでは、海外で学会発表をするにあたって知っておくと便利なノウハウをお話しする。

ワークショップタイトル:研究者と現場:研究者に求めること

司会:渥美公秀(大阪大学)

話題提供者:明石照久(神戸市都市整備公社)

実吉威(特定非営利活動法人 市民活動センター神戸)

指定討論者:南博文(九州大学:交渉中)

趣旨: "よい理論ほど実践的なものはない"としてきたグループ・ダイナミックスでも、ようやく現場と協働しながら研究が行われるようになってきた。ただ、当然ながら、現場と協働で研究を進める際には、いくつもの点に注意を払わねばならない。本ワークショップでは、阪神・淡路大震災の被災地行政機関にあって震災復興にご尽力され、この度神戸大学大学院より博士号(政治学)を取得された明石照久氏(神戸市都市整備公社)被災地で市民活動の中心的存在でありつづける実吉威氏(特定非営利活動法人 市民活動センター神戸)をお招きし、研究者に対する意見を活動現場から率直に語っていただく。そして、指定討論者には、実践現場における研究に造詣の深い南博文理事(九州大学:交渉中)をお迎えし、参加者とともに、現場から研究者に何が求められているのか、研究者はどう見えているのか、どうすれば、より生産的な協働的実践が行えるのかといった点を議論し、今後の研究・実践活動の糧としたい。

すでに現場での実践的な研究を進めておられる会員、これから現場での研究を始めようとしておられる会員、さらには、現場での研究に批判的な皆様の積極的なご参加をお願いします。

三隅賞受賞者決定

グループダイナミックス学会では、実験社会心理学研究に掲載された論文の中から優秀な論文に対して、「優秀論文賞」を設けていますが、これと同時に、アジアの社会心理学に卓越した貢献をした論文著者に贈られる「三隅賞」も設けています。この賞は、 Asian Journal of Social Psychology に掲載された論文が選考対象となります。ちなみに2000年は Vol..3 に掲載された高野陽太郎・櫻坂英子論文が受賞されました。2001年はアジア社会心理学会メルボルン大会時に開催された選考委員会において、Vol..3に掲載された 2 論文(下記囲み参照)が受賞されることになりました。なお受賞者の方々には、7月に開催されたアジア社会心理学会メルボルン大会において、賞ならびに賞金1,000ドルが授与されました。

2001年の審査委員会による審査経緯については、堀毛会長よりその概略をご報告いただきました。ここにご紹介させていただきます。

本年度の三隅賞選考委員会は、7月のAJSPの折りに開催されました。選考委員は、規定に基づきAJSPから山口勧先生とKwok Leung先生、本学会から大渕憲一先生、山岸俊男先生、それに堀毛がくわわり合計5名による選考がおこなわれました。

事前に投票により3本の論文が候補となり、当日論議が行われた結果、以下の2本の論文が甲乙つけがたく、同時受賞ということで意見の一致をみました。なお、審査の結果はAJSPの総会で報告され、その場で表彰もおこなわれました。謹んでご報告申し上げます(堀毛)

James S. Uleman, Eun Rhee, Nenshad Bardoliwalla, Gün Semin & Midori Toyama 2000 The relational self: Closeness to ingroups depends on who they are, culture, and the type of closeness. *Asian Journal of Social Psychology*, **3**,1-17.

Sik Hung Ng, Cynthia S. F. Loong, James H. Liu & Ann Weatherall 2000 Will the young support the old? An individual- and family-level study of filial obligations in two New Zealand cultures. *Asian Journal of Social Psychology*, **3**,163-182.

三隅賞に関する規定について

三隅賞に関する規定をお知らせいたします。

三隅賞

三隅賞は、長きに渡って日本グループ・ダイナミックス学会の会長を務められ、アジアの社会心理学の発展に多大なる貢献をされた三隅二不二教授に敬意を表し、日本グループ・ダイナミックス学会とアジア社会心理学会が合同で設立したものである。本賞は、アジアの社会心理学に卓越した貢献をしたと看做された、Asian Journal of Social Psychology 掲載の論文の著者に贈られる。

賞の承認

本賞の承認は毎年行われる。賞、ならびに賞金1,000ドルの授与式は、隔年で開催され

るアジア社会心理学会大会の場で行われる。

三隅賞選考委員会

選考委員会は5名の委員で構成される。そのうち3名は、日本グループ・ダイナミックス 学会より、2名はアジア社会心理学会より推挙される。

選考過程

三隅賞の対象となるのは、前年に刊行された Asian Journal of Social Psychology に掲載された論文のうちの1本である。選考は以下の過程によって行われる。

- (1) それぞれの委員が、賞の候補として2本以内の論文を推薦する。委員は、以下の2つの場合、その論文を推薦することができない。(a)委員自身、もしくは委員の指導する学生が著者の論文(「利益論文の葛藤」: CIPと省略)。(b)主たる著者が、既に前年の三隅賞を受賞している場合。
- (2) 推薦された論文のリストが作成され、各選考委員に配布される。委員は、CIPを除外したそれぞれの論文を、5段階評定で評価する (5が最高点)。
- (3) 推薦された論文の平均点のリスト(この際、論文の著者名とタイトルは伏せられる)が 作成され、各委員に配布される。リストの作成は、日本グループ・ダイナミックス学会の 運営事務局が実施する。
- (4) 委員会は、最高3本の論文を、三隅賞の最終候補として選別する。この決定には、配布されたリスト上に記載された平均点のみが勘案される。
- (5) 委員会は、最終候補となった論文について協議し、投票を行う。最終投票において、 各委員は、CIPを除く最終候補論文について順位を付ける。最終投票において最高の平均 点を得た論文が、三隅賞の対象として選ばれる。

*** Misumi Award ***

Misumi Award is established jointly by the Japanese Group Dynamics Association and the Asian Association for Social Psychology in honor of Professor Juji Misumi, a long time president of JGDA who made great contributions to the development of social psychology in Asia. The award shall be conferred to the author(s) of the article in the Asian Journal of Social Psychology of which contribution to the development of social psychology in Asia is prominent.

Granting of the Award

The Award shall be granted each year. The ceremony for granting the Award and the prize of \$1,000 shall take place at the Biannual Meetings of the Asian Association of Social Psychology.

Award Selection Committee

The selection committee consists of five members. Three of them shall be recommended by the Japanese Group Dynamics Association, and two by the Asian Association for Social Psychology.

Selection Procedure

One paper shall be selected for Misumi Award each year from the papers published in the volume for the previous year of the Asian Journal of Social Psychology. The selection shall proceed according to the following procedure.

- (1) Each committee member nominates up to two papers as candidates for the Award. He/she cannot nominate (a) papers (to be abbreviated as "conflict of interest papers" or CIP) of which he/she or his/her direct student is an author or (b) those of which the senior author has already received the Misumi Award in a previous year.
- (2) A list of nominated papers is composed and distributed to the committee members. Each committee member evaluates each paper in the list except the CIP on a five point scale (five being the highest score).
 - (3) A list of average scores of the nominated papers (without the authors' names

and the titles) is composed and distributed to the member. The composition of the list is done by the managing office of the Japanese Group Dynamics Association.

- (4) The committee decides how many papers within the limit of three papers to select as the final candidates of the Award. The decision shall be based on the distribution of the average scores on the list alone.
- (5) The committee discusses the final candidate papers and then votes. On the final voting, each member rank orders the final candidates except the CIP. The paper that receives the highest average score on the final vote is selected for the Award.

三隅賞受賞者スピーチ

三隅賞を受賞された先生方、おめでとうございます。今回は、昨年度の受賞者である高野陽太郎先生と、本年度の受賞者であるJames S. Uleman 先生と Sik Hung Ng 先生に受賞のスピーチをお願いいたしました。それでは先生方、よろしくお願いいたします。

高野陽太郎氏のスピーチ

東京大学文学部 高野陽太郎

私どもの論文に三隅賞を賜り、たいへん光栄に思っております。

この論文にはちょっとした「歴史」があり、そのため、今回の受賞は、私にとっては特に感慨深いものでした。もう7、8年前になるでしょうか、この論文のもとになった日本語の原稿を日本のある学術雑誌に投稿しました。この分野を担当されていた編集委員は、原稿の論旨とは反対の立場をお取りになっている方でしたので、多少の軋轢は覚悟しておりました。しかし、審査の結果は予想をはるかに超えるものでした。審査報告書には、「素人の大風呂敷である」「著者は cross-cultural study をおこなうには未熟である」といった手厳しい言葉が並んでいて(当時、私は既に Cognitionと Journal of Cross-Cultural Psycholgy に比較文化関係の論文を発表していたのですが)、問答無用で却下されてしまったのです。

今回の受賞によって、私どもの研究に一考の価値を認めてくださる研究者が少なくないことを知り、たいへん心強く感じると同時に、受賞に至るまでの「歴史」に関連して、いろいろなことを考えさせられました。

一つは審査のあり方です。私どもの論文の場合、広く支持されている説を批判する内容であったにもかかわらず、AJSPへの掲載をお認めいただくことができました。AJSPの公正な審査には大いに敬意を表したいと思います。しかし、公正とは言い難い審査が横行していることも事実です。欧米の権威ある雑誌の場合でも、論敵ばかりの審査員が論文を却下してしまうという例があり、私も痛い目にあったことがあります。一方、私自身が審査員を務めるときのことを考えてみると、原稿が私の説を正面から批判している場合には、その原稿の欠点ばかりが目についてしまうということも事実です。編集委員は、投稿された論文とは反対の立場をとる研究者を審査員に選び、その意見を聞いてみたいと考えるものですが、そうした審査員が過半数を占めるような審査が妥当なものなのかどうか、考えてみる必要がありそうです。

な審査が妥当なものなのかどうか、考えてみる必要がありそうです。 もう一つは専門分野の壁です。「素人」「未熟」という言葉が投げかけられたのは、おそらく、私が社会心理学の出身ではなかったからなのでしょう。私のもともとの専門分野以外の研究者からは、「素人」と言われたことがほかに何度もありました。しかし、人間というものを理解しようとするとき、人為的に仕切られた狭い学問分野の中だけでそれを達成することは到底不可能です。さまざまな分野の知見を考慮に入れながら考えていくことがどうしても必要になります。自分の分野の専門知識は、他の分野の研究者を排斥するためにではなく、やはり、協力するために使うべきなのだろう、とそんなことも改めて考えさせられました。 New York University James S. Uleman

We were delighted to learn that we received the Misumi Award for our paper, "The relational self: Closeness to ingroups depends on who they are, culture, and the type of closeness." This is the first paper we published that uses the Circles of Closeness scale, and we felt that our results make several important and neglected (although not novel) points about the literature on individualism and collectivism. But as relative newcomers to this area of research, we realized that we could easily be wrong. So it was especially gratifying to have this paper selected for this award by such distinguished groups as the Japanese Group Dynamics Association and the Asian Association for Social Psychology.

This award is also a tribute to the patience, persistence, and expertise of the reviewers who had many useful suggestions that greatly improved the paper, and who helped us understand some of the results that initially mystified us. We are also very grateful to Prof. Yoshihisa Kashima who served as the action editor for this paper. His suggestions were extremely useful, and revealed both his methodological sophistication and cultural wisdom.

Thank you again for your vote of confidence in our research program.

Sik Hung Ng 氏のスピーチ

City University of Hong Kong Sik Hung Ng

I felt honoured at being selected for this year 's Misumi Award. The award ceremony, held during the joint conference of the Asian Association of Social Psychology and the Association of Australasian Social Psychologists in Melbourne, Australia, was a simple and yet memorable one. My co-workers and I remain grateful to the Misumi Award Selection Committee for the honour bestowed on us.

In response to Drs Tomohide Atsumi and Shuichi Hirooka's invitation to write a note for JGDA-News on I felt on receiving the Award, I thought it might be useful for me to reflect on social psychology.

As an undergraduate I was attracted to sociology for its insights on society and culture, and to psychology for its experimental discoveries on the functioning of the 'mind and the behaviour of individuals. But it was social psychology that I eventually made my intellectual home. In Europe during the early 1970s, where I undertook my PhD study, social psychology was sheer intellectual delight. Theories on inter-group relations, language and ethnicity, minority influence, and social representations were taking shape and breakthroughs were on the horizon. Constructive engagements with mainstream (American) social psychology were occurring and some were bearing fruit. As a foreign student who had witnessed large-scale social changes back home (in Hong Kong and mainland China), I was deeply touched by the passion exuding from pioneers of the time in their attempt to understand social change from a social psychological perspective. For all these reasons, I felt good in being part of an exciting intellectual movement. Over the years I have come to know many talented and loyal colleagues and students. And I have been very fortunate in meeting Professor Misumi many years ago, and a number of accomplished Japanese social psychologists in recent years.

My research paper that won the Misumi Award was derived from a research programme on issues brought about by population ageing and increasing longevity. Throughout human civilization, lives have been short and societies have had time to adapt to this demographic imperative. Forty years ago, a silent demographic revolution of longevity began to take root in Japan and the Scandinavian countries; by now life expectancies exceeding 75 years are commonplace for the first time in human history. In social evolution terms, the world is not simply ageing but, more accurately, ageing in a big rush. This demographic-driven social change is intertwined with increasing economical and ideological pressures on governments to redefine or even minimize their obligations toward senior citizens. Hence the question: Who will support the old? Our research addresses this question through cross-cultural comparison and by means of an innovative statistical procedure to treat the family as a unit of analysis. I look forward to exchanging ideas with my Japanese colleagues on these and the more general issues social change in the Asian context.

アジア社会心理学会第4回大会(メルボルン大学)印象記

7月10日から13日にかけて、オーストラリアのメルボルン大学を主催校としてアジア社会心理学会第4回大会が開催されました。

大会初日にはアジア社会心理学会会長の基調講演の後、日本グループダイナミックス学会 (JGDA)の堀毛会長による基調講演が行われ、また、JGDAの主催で "The Future Of The Asian Journal Of Social Psychology" と題されたシンポジウムも開催されました。日本からも数多くの参加者がありましたが、今回、お二人の先生より大会に参加された印象をご寄稿いただきました。

AASP印象記 メルボルン再訪

北海道教育大学 今川民雄

久しぶりの、6年ぶりのメルボルンであった。AASPへの参加は初めてであるが、第1回のSASPに参加した時のことを思い出す。その時と大違いなのは基調講演を山口AASP会長、堀毛JGGD会長と、二人とも日本人であったことである。そんなことに感心しても始まらないといわれそうだが、時代の変化を象徴した出来事と思われた。

こんな事に感心しても始まらないことをもう一つ。口頭発表の大部分がパワー・ポイントによるものだったことである。少なくとも私の大学では、パワー・ポイントを利用できる教室が数えるほどであるのに対し、どの教室でもそうした設備が整っていることに、日本の(私の大学の)遅れを感じた。「教育現場」におけるIT教育の遅れが指摘されて久しいが、そして、知識としては持っていたことではあるが、教育環境のこの違いは年を経て余分な努力を人に強いることになる。

ところで、SASPの第1回大会での発表に際して、今大会長の嘉志摩先生に口頭発表とポスター発表の評価について尋ねたことを思い出す。当時SASPではポスター発表はごくまれで、口頭発表の部屋の一部に「恥ずかしげに」張られていた。それに比べると今回は、ポスター発表はあふれんばかりにあった。ただ、ポスター発表の場にいると、参加者のほとんどが日本人であり、英語で書かれた発表の前で日本語が飛び交っており、ほとんど日本の学会いるのと変わりない印象を受けた。ポスターセッションがあまり馴染みがないためであろうか、それとも丁度昼飯時のため、参加者が食べる方に熱中していたためであろうか。これまでのAASPに参加したことがないため対照群としての経験が乏しいことで、結論は棚上げである。ただ、それを見ていた某先生が、「自分が大学院の時にこういう環

境だったら」と漏らした言葉が一番印象的だった。

最後にAASPの学会活動の趣旨が学会員に生きているのか、多くの研究発表でも、クロスカルチュラルな視点からの言及が多かった。そのことに関心の高まりを感じながら、何をどこまでカルチャーで説明できるかが、しっかりと抑えられてゆくことが課題になっていると思われた。

第4回アジア社会心理学会印象記

一橋大学大学院社会学研究科 藤島喜嗣

唐突ですが、今回の舞台であるメルボルンは南回帰線より南にあります。さて、あちらでは、太陽はどう動くでしょうか? 正解は「東から昇り、北へと向かい、西に沈む」です。滞在中に確かめましたので、間違いはないはずです。さて、この質問を、学会前にお会いした社会心理学者の方々にさせてもらいました。正解の方もいらっしゃったのですが、少なからぬ方が「当然、東 - 南 - 西」と答えてくださいました。これは、日本では正解ですが、メルボルンでは不正解です。また、「西 - 南 - 東」と答えてくださった方もいらっしゃいました。「太陽は必ず南側」と考えれば、メルボルンでの太陽の動きは確かにこのように見えます。

ここから個人的に感じたことが二つあります。一つは、同じ原理にしたがっていても、場所が違えば全く違う現象になる、ということです。もう一つは、気付かないうちに、物事に対して自分の持つ常識をあてはめて考えがちだ、ということです。これらは、第4回アジア社会心理学会に参加して気付かされたことでもありました。

今回の第4回大会は、7月10日から13日までの間、オーストラリアのメルボルン大学で行われました。2年前に台北で行われた第3回大会よりも、規模的に拡大したとはいえないものでしたが、その一方で、議論の場としてより深化し、新しい見解を生み出す場として機能しているように感じました。

アジア社会心理学会といえば、文化心理学的視点に基づいた研究が多いという印象があります。今回もそのようなテーマに基づくものが多かったのですが、その様子は今までとは異なっているように感じました。文化差の存在を単純に指摘する報告を超えて、それがなぜ生じるのかを積極的に考えようとする研究報告が印象に残りました。例えば、日本人における自己批判・自己卑下を扱った、一連の発表やシンポジウムがこれにあたります。これらの研究報告は、おおまかに、文化によって異なる心理プロセスが生じていると考えるものと、実は単一の心理過程なのだが文化的文脈により現れ方が異なるとするものとがあり、統一見解に至っているとはいえません。しかし、一つの現象に関する互いの報告を尊重しつつ精緻に吟味し、結局は何なのかを議論しようとする姿を拝見し、将来の研究の進展が大いに期待させられました。そして何より、ただ聞いているだけだった僕自身に、今後の研究のインスピレーションを与える大きな刺激となりました。

本大会の印象として、必ずしも文化心理学的な視点によらないシンポジウムや発表が目に付いたこともあげられます。例えば、J. Liu氏によるエイジングに関するシンポジウムや、M. F. Kaplan氏による陪審制度と社会心理学に関するシンポジウムなどがこれに当たると思います。特に前者は直接見ることができました。この時、どの研究も世代間関係に関する一般的問題を扱っていたのですが、その結果には各文化固有の特色が反映されており、聞く側に新鮮な印象を与えてくれました。また、発表者の方が、自分の国では思いもよらなったであろう質問がフロアからなされたことに、当惑しているような場面もありました。こういった出来事は、研究知見を一般化する際に注意すべき点を、あらためて指摘しているように思いました。そして、アジア社会心理学会が、文化によらない心理過程を検討している研究者にとっても、有意義な場であることを示しているように思いました。

ちなみに、今回の大会は、オーストラリア社会心理学会と連結して行われました。日程の都合上、ほとんど見ることができなかったのが、本当に残念でした。こういった開催国の年次大会との連結は、興味深い研究にふれる機会が増えるので大歓迎です。今後の大会でも行われることを切に希望します。

最後に、今回の運営に携われたすべての方々に心から感謝いたします。また、興味深い発表を聞かせてくださった皆様、僕の拙い発表にコメントしてくださった皆様にも心から感謝します。本当にありがとうございました。

実験社会心理学研究 第41巻1号掲載決定論文

<一般論文>

【原著論文】

矢守 克也 社会的表象としての「活断層」 - 内容分析法による検討 小杉 考司・藤澤 隆史・石盛 真徳・水谷 聡秀 ダイナミック社会的インパクト理 論における意見の空間的収束を生み出す原因の検討

【資料論文】

安達 智子 就業動機尺度の概念妥当性 - 動機・自己効力感との関連について -中丸 茂 文化心理学と随伴性 - 随伴性の心理学からの提言 -

会員移動

事務局からのお願い

実験社会心理学研究の特集テーマ募集

事務局では、実験社会心理学研究の特集号テーマを随時募集致しております。詳細は事務局までお問い合わせください。

実験社会心理学研究の書評候補募集

事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。 よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

学生会員会費についてのお知らせと確認【 重 要 】

前回の総会におきまして、「博士後期課程在学中の会員を含めて、学生会員会費を適用すること(年会費¥8,000)」、および、「学生会員であることは、自己申告によるものとし、在学証明の提出義務はないこと」が決定されました。しかしながら、今年度会費の納入に当たり、若干の混乱が見られました。上記の決定が必ずしも周知されていなかったこと、および、社会人入学などの現状から、学生の定義が必ずしも一義的ではなかったことが原因だと思われました。そこで、常任理事会では、「学生の定義を"在学証明を取得できる人"とするが、自己申告によって学生会員になることができるので、学会に対して、在学

証明の提出を義務づけないこと」を確認しました。ご自身の会員カテゴリーにつきまして、 ご不明の会員は、お手数ですが、事務局までご一報いただけますようお願いいたします。

広報担当からのお知らせ

広報担当は、新刊本に関する情報を広く募集しています。グルダイ会員に紹介したい書

籍がありましたら、広報担当までご推薦ください。 10月27日~28日に開催される日本グループダイナミックス学会第49回大会(熊 本大学)に参加された方の大会印象記を公募いたします。11月末日までに広報担当まで 送付してください。よろしくお願いいたします。

ホームページは http://www.soc.nii.ac.jp/jgda/ です。なお、このページに関するご意見 ご要望は、広報担当常任理事の廣岡 (三重大学: shuhiro@edu.mie-u.ac.jp) もしくはHP 担当幹事の三浦(大阪大学:asarin@syasin5.hus.osaka-u.ac.jp)までお知らせください。

グルダイ学会関係連絡先

投稿論文の送付、機関誌編集に関する問い合わせ、その他学会運営に関するご意見 岩手大学人文社会科学部 堀毛研究室

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-34 岩手大学人文社会科学部

電話·Fax: 019-621-6842 E-mail: kekehori@iwate-u.ac.jp QGB03376@niftyserve.or.jp 学会事務局

大阪大学人間科学部 渥美公秀研究室

〒565-0871 吹田市山田丘1-2 大阪大学人間科学部

電話 & Fax: 06-6879-8066 E-mail: CXC02237@nifty.ne.jp

ニュースレター(ぐるだいニュース)の編集・記事の投稿

三重大学教育学部 廣岡研究室

〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学教育学部

電話·Fax: 059-231-9329 E-mail: shuhiro@edu.mie-u.ac.jp

メールマガジン(JGDA_Flash)へのニュース記事投稿

本年1月より【日本グループダイナミックス学会・広報(速報)メールマガジン】 (JGDA_Flash)を試験的に運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュ ースを会員のみなさまにe-mailでお知らせしようとするものです。学会開催情報・研 究会情報・公募情報を中心に、約40通のメールマガジンがすでに配信されています。 登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合 <u>わせ</u>等は、グルダイ広報メールマガジン運営担当マスターのアドレス

E-mail: jgda flash@epsycho.edu.mie-u.ac.jp

までお願いいたします。また、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報な ども大歓迎です。同アドレスまでお送りください。

住所・所属変更

日本学会事務センター大阪事務所(学会センター関西 担当:山田範子)

〒565-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2

TEL 06-6873-2301 FAX 06-6873-2300 E-mail: nyamada@bcasj.or.jp

(編集後記) 第21号のぐるだいニュースは、熊本大学で開催される第49回大会の直前号として編集されま 熊本大会準備委員長の篠原先生よりご案内をいただきました。地理的なハンディキャップもあり、若干 発表数が少ないようですが、これまでにない企画がいくつも盛り込まれているようです。盛会となることをお祈 りいたします。
理事会ではAJSPの継続刊行問題をはじめとするグルダイの将来について真剣な議論が行われ ています。熊本大会時の総会での議論が期待されます。 ぐるだいニュースを編集し始めてから3号目ですが、 なかなか慣れません。事務手続きの変更のため、会員移動情報については多少の混乱があります。3月から7月 までの移動情報についてお知らせしましたが、誤情報や漏れなどございましたらお許しください。(廣)。

- - - - - 広告挿入 - - - - -